

評価単位		評価のまとめ
I 保 育 課 程	1. 保育目標	○カリキュラムポリシーが3歳未満児の生活全般を捉えたものになっている。 ○子どもの姿、月、年間評価と反省と照らし合わせ、話し合い、見直しにつなげていく。
	2. 保育課程の編成	○保育指針を基に保育所の特色、子どもの発達、姿に即した保育課程の編成になっている。 ○研究テーマでもある「3歳未満児の表現」は保育実践が積み重なってきている。 ○保育課程は、引き続き、保護者開示型の写真記録に照らし、実践とのつながりを深めた作成を試みた。
	3. 保育日数・時間	○ウイズコロナの下、保護者の就業・研究時間もコロナ前の状況に戻り、保育時間が長くなる家庭が増えた。その分方 方の疲れが出やすい時間帯の保育を安全に心地よく過ごせるように試行錯誤した。 ○教授会議などでの延長保育の利用が時々あった。 ○社会状況も考慮しつつ、今後も乳幼児期の成長に相応しい生活リズムを家庭と連絡を密にし、援助していきたい。
	4. 保育内容と成果	○大学構内で歩く、走る、登る、降りる、跳ぶ等の運動機能の発達を促す活動を積極的に展開した。子どもの人数が 少ない時など、安全性が保たれると判断した日には、教育の森公園など、学外への散歩も行い、高低差の多い地を歩 いたり岩場の上るなど身体を存分に駆使する経験を重ねた。 ○今年度も日常的に表現活動を十分に行った。結果(できあがり)を問うのではなく、何が行われたどのように表現され たか、室内装飾として楽しむと共に、保護者にも共有できるよう、玄関等に掲示した。お散歩先で子どもたちが拾って きたものを玄関に飾ることで、送迎時の保護者と子どもの会話のきっかけにもなっている。 ○職員間で日々、こまめにコミュニケーションをとり、保育内容の確認、変更等を柔軟に行った。 ○連絡帳、日誌、雑務に追われ、打合せの時間が取りにくい、極力計画的に短時間でも話し合うよう努めた。
	5. 行事	○伝統的な行事を知り、歌や簡単な製作を持ち帰ることで保護者と共有して家庭でも楽しめた。 ○3年ぶりに10月に「親子で遊ぼう会」を開催した。11月の大学祭の時には卒園児・在園児の同窓会を開催し、保護 者同士の交流の場となった。感染に十分留意して、動線を確認したり、打合せを綿密に行うことで、安心・安全に行うこ とができた。年2回の保護者会も3年ぶりに再開し、回数を分け、時間帯も複数用意することで、結果的に参加家庭が 増えた。状況をみながら、柔軟な運営を今後も検討していきたい。 ○保護者と十分にコミュニケーションが図れるように努めた。また、希望者対象で1日一家庭、一家庭1名限定で保育 参加をアナウンスしたが、今年度希望者はいなかった。0歳児については、慣れ保育初日に、保護者と共に過ごしても らうことで、ナーサリーの様子が伝わり、安心感を持てたようである。子どもにとっても初めての場所で、保護者が一 緒にいることで、安心して過ごす第一歩となった。1・2歳児についても検討していきたい。
	6. 研究・研修	○ここ数年見送っている、他施設の保育者や研究者にも声掛けをして年に4程度ナーサリー乳児保育実践研究会 は今年も見送ったが、学内の先生に来ていただき、研究会を行ったり、附属幼稚園や文京区こども園との三園合同研 究会に、常勤非常勤問わず、都合がつくスタッフは参加した。三園での研究会で話題になったことが、日々の保育に も活かされ、よい刺激となっている。園内では、COVID19感染に関連した学習の機会やノロウイルスに関する再学習 の機会を職員全員を対象に数回設けた。職員会議でも毎月の担当者を決め、日々の保育で興味を持っているテー マについて発表し、語り合う機会を設けた。 ○5月の保育学会シンポジウムにてポートフォリオ・同僚性をテーマに発表した。今年度職員の入れ替わりが多く、来 年度の発表登録は見送ったが、次年度以降、継続していきたい。 ○オンライン外部研修に参加した(子どもの文化学校・保育プラザ研修)。東京都認可外施設向けの研修にも参加し た。 ○今後も非常勤保育士を含め、保育を振り返り、研究を積み重ねていきたい。
A 大 学 の 保 育 所 と し て	1. 経営・組織	○2016(平成28)年度より利用を内部者に限定して4年目になるが、今年度も希望者全員を入所時期・登園回数い ずれにおいても希望通り受け入れた。しかし、COVID19感染拡大の影響下、教職員や学生の入所者が極めて少ないた め、今年度は施設長判断で、文京区在住の1・2歳児を数名受け入れている。学内関係者は年度途中入所が多いた め、必ず入れる枠を用意しながら、地域枠の可能性も探っていく。 ○月に1度程度、非常勤職員も交えての全員職員会議は、月に1回開催している。事務連絡はできるだけ前日や日中 に分散で行い、主に保育の話ができるようにした。常勤会議やクラス会議などは行っていないが、都度都度時間を見 つけて話せる時間を大切にしたい。今後も、仕事内容の連絡、連携に努めていきたい。
	2. 出納・整理	○昨年度までは主任保育士と非常勤が協力して経理にあっていたが、今年度は主任保育士が保育に入らなけれ ばならない時間が多く、非常勤が主に経理事務を担当してくれている。しかし、事務中心の非常勤も子どもの人数が 増える後期は0歳児クラスの保育に入る必要があることから、時間のやりくりが難しい。附属学校部のサポートのおかけ で何とかこなせている状態である。連携して円滑に行っていきたい。 ○光熱費や食材の高騰や園児数の増加により、削れない出費が増えた。10年ものの家電製品が次々と壊れている 中、今後の出費も懸念される。今後も運営費の使途についても計画的に進めるよう努めていく。
	3. 施設・設備	○大塚宿舍改修による現園舎が15年目に入り、乳児保育施設としての不十分さや経年劣化は否めないものの、大学 内施設担当に相談して細やかに修理や不具合に応じていただいている。子ども用トイレの温便座を延長コードで電 気を取っており、危険であったが施設課に相談し、安全に利用できるようになった。
II 保 育		

所 運 営	4. 健康	<p>○お便りで健康に関する情報を載せたり、感染症が出たときは、迅速に保護者に伝えた。</p> <p>○感染症やその他、疾病の発症を防ぐため大人・子どもの手洗いの徹底、おもちゃの消毒等、職員保護者の共通理解に努めた。</p> <p>○園に看護師がいらないが、怪我や病気の時に幼稚園の養護教諭やこども園の施設長・看護師に相談できる環境が本当にありがたかった。</p> <p>○アレルギーの子どもへの配慮を徹底した。更に緊張感をもって日々食事の援助をする。</p> <p>○三大食物アレルギー除去のおやつを引き続き実施した。</p>
	5. 安全	<p>○毎月の避難訓練での反省を次に活かし、1歳児2歳児とも訓練が身につけて保育士の指示に従い、落ち着いて行動している。図上訓練も行うことで備蓄品を確認して必要な物の検討ができた。</p> <p>○事故、怪我が起こった際は再発防止策を話し合い、全職員の共通理解と環境整備に努めた。</p> <p>今後も安全、安心な保育所を目指していく。</p>
	6. 開かれた保育所	<p>○徽音祭に合わせて行ったナーサリー同窓会は、参加者が多く近況報告や子育ての情報交換、交流の場となった。卒園、転園した親子が戻ってくる場として定着してきている。引き続き定例開催していきたい。</p> <p>○国内外の保育園幼稚園保育者養成大学からの視察を受け入れ、積極的に意見交流を行った。</p>
	7. 情報	<p>○個人情報、経理関係のデータが流出することのないよう保管方法を工夫している。今後も危機感をもって扱うことを徹底したい。</p> <p>○附属学校課に協力していただき、HPの内容を更新する計画中である。4月に向けて変えるところ、もう少し時間をかけて変えるところを分けて検討中である。</p> <p>○今後も個人情報の管理、保育写真の管理を徹底する。</p>
	8. 保護者との連携	<p>○10月と3月の土曜日に行ってきた親子で遊ぶう会は3年ぶりに実施した。○2017年度に開始し定着してきた「いずみナーサリーの日」(保護者との自由昼食と談話の会)は昨年度に引き続き今年度も実施を見送ったが、プチ懇談会と称して、保護者会以外にも小さな会を2回開催した。(卒園後の園選びについて／自由にお話し会)</p> <p>○個人別のポートフォリオを作成、月ごとに更新し、保護者に手渡した。保護者からのコメント欄があり、そこに記入して返却してもらっている。本人のものは持ち帰りが可能で、他児のものも相談室で閲覧可能としたが、相談室が物置と化しており、機能していない。個人面談では使用しているが、その他自由にほんの少しの時間でも保護者がくつろぐことができる場にしていきたい。</p> <p>○保護者交流・保護者との連携の機会を多くを見合わせ たため、日々の送迎時の直接のやりとりを平年以上に丁寧にもた十分に行うよう心掛けた。○今後も、保護者が気兼ねなく相談等もちかけられるような体制を継続すると共に、日常的に保育を伝え、子ども理解と信頼関係を築くよう努める。</p>
評価単位		評価のまとめ
I 大 学 と の 連 携	1. 連携研究	○学部3年生のインターンシップ3名を受け入れた。1名はインターンシップが終わった後も、不定期にボランティアとして来てくれている。
	2. 連携企画	○COSMOSとの協働企画についても今年度は実施されなかった。コロナ禍においても学内乳幼児保育の場であるいずみナーサリーの存在、子どもの存在を大学内に伝え共有する手立てを考えていきたい。学内周知のため、附属学校課の協力をいただき、掲示板にポスターを貼った。
	3. 授業交流	<p>○『栄養カウンセリング論演習』の授業で3歳未満児の発達や生活について講話を行った。例年実施している履修生による保育参加は行わず。</p> <p>○『子ども学フィールドワーク』で学部生の観察を受け入れ、観察後には振り返りを行い、振り返りの会にも参加した。</p>
	4. インターンシップ・ボランティア	○子ども学コース3名、生活社会科学講座1名のインターンシップを受け入れた。○学生サークルOchasによるボランティアを再開した。まずはおやつを食べるところを見てもらうところからはじめ、3月より週に1回のおやつ作りを再開予定である。おやつのおやつ作りについては例年通り受け入れ、来年度についての対面での打ち合わせの機会も持った。○Ochas以外のボランティアについては、今年度希望が無かった。
	5. その他	○男女共同参画担当との協働により、2017年度から継続して休日の通常授業開校日に臨時保育室としてナーサリーを開室した。
	6. 見学者の受入	加えて、今年度より複数の入試日についても臨時保育室を開室した。普段は居住地域の保育園に預けている学内関係者が、我が子を働く場所に連れてくる意義も感じられた。初めてナーサリーに入ったという保護者も複数いらっしやり、小さな子がいる教職員にとって、子どもを預ける以外の何か情報発信ができるといのかもかもしれないと思った。(ナーサリーにある絵本の貸し出しなど、入るきっかけになるようなもの)
	7. 他機関との連携	○見学の希望は無かった。○直営の大学内保育所、利用日数選択型保育所として国内外の関心は大きい。今後も積極的に見学を受け入れ大学直営保育所の良さを発信していきたい。こども園に見学に来た方が併せてナーサリーを見学する機会が複数回あった。こども園の先生がナーサリーも併せて紹介して下さることもありがたい。
	8. 地域貢献	○国立大学関連社会福祉法人理事長園長会は京都大学関連法人の主催で行われる予定だったが、今年度早々に中止が決定。2月にオンラインによる状況報告、意見交換、交流を行った。
III 地 域 貢 献	8. 地域貢献	○地域親子向けの子育てひろば「いずみナーサリーで遊ぶう会」(2018年度に不定期に開催開始、2019年度は定期開催)は今年度開催を見合わせた。折を見て再開を目指しつつ、他手段での貢献についても検討していきたい。

令和4年度 いずみナーサリー評価(自己評価)まとめ (課題)

<保育課程>

- 子どもの姿や保育を振り返り、クラスを越えて保育士が連携をすることで柔軟な保育を展開することができた。
- 乳児保育の独自性(高い個別性、成長著しい時期のため理解の固定化が不可能)と集団生活の中で育つ意義の両義性を発揮できた。
- 今後も子どもの姿に応じた利用日数選択型の柔軟なかつ安定的な異年齢保育を目指す。

<安全・環境>

- 災害時の想定に様々な場所、時間帯を設定し、訓練することで安全な避難の仕方や必要な物を確認した。
- 遊び場、生活の場の整備、食事提供の仕方、アレルギー食の配慮、感染症予防等、安全の徹底を図った。
- COVID19感染拡大防止のため、入室時の手洗い、検温、健康チェック票記入を徹底した。また、施設内の消毒、玩具・教材の殺菌消毒を行いました。

<大学との連携・研究>

- 人間社会科学科子ども学コース、食物栄養学科の授業への関与、連携は定着してきている。
- COVID19の影響は今後も続くと思われるため、大学や他附属との協働の従前以外のあり方についても検討していきたい。

<他機関との連携・研究>

- 国立大学法人関連保育所理事長園長会の年次大会はCOVID19感染拡大防止の観点より中止となったが、オンライン会議およびメール・電話でのやりとりをすることで情報交換・交流を続けることができた。